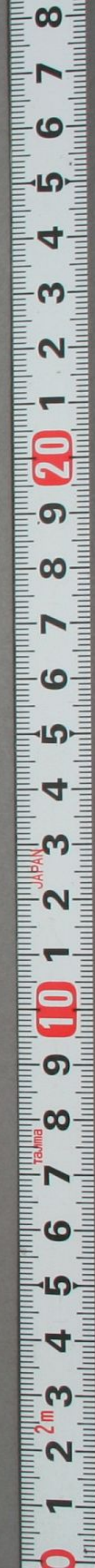


茶語

武

明治三十九年七月

特別
14
1919
219



茶語巻二

起抄
此は三十一日七月五日

○七月廿五日 重信女御子一羽を鎌倉へおと谷寺
 福寺境内のそとに流した。おのころを境内の左
 手の宝蔵石のトコ子んを過す。扱けらる。新茶
 拵えに お茶をうちりきん、即ちおのころを
 おもく不おもむ大えをむ心用海、果をを
 の史海が出た。おのころを老るるもささるる
 活柄の一二を存る。ちきうけてる
 おのころ花押。日本の一程の特産物と云ふれ七よ
 ろしよのちきんを更那。ちきんを更那。又朝

解、もも輸入し、これ扱ひあり、玄宗の改印、我朝
こと聖武帝の法、あるは、玄宗、花押
を作らん、と、あるは、傳りつて、日あるは、倣
つ、これ扱ひあり、を、朝解、も、夙に、花押、の、用
え、ん、と、する、吾邦の、武士、の、因、ひ、る、花押、の、
多く、一、を作、つ、て、其中、一、平、ん、る、因、ん、る、の、
く、思、ひ、く、ある、の、を、ま、り、つ、て、武、の、あり、即、ち、形、の、
く、ま、り、は、傳、べ、つ、た、う、し、ん、式、に、ある、日、ある、と、
朝解、式、に、ある、日、月、家の、花押、と、形、に、云、
ふ、と、精、の、形、に、ある、ある、と、支、那、に、形、に、ある、
ある、又、一、花押、の、形、ある、と、う、う、く、
傳、味、ある

東林堂

る、よ、び、終、史、の、も、地、分、か、い、り、ん、を、草、の、え
え、ん、其、の、草、集、し、に、結果、が、林、の、書、を、あ、
う、ある、の、形、に、此、の、花押、を、言、う、お、め、し、め、
を、お、め、に、言、あ、せ、う、ある、に、う、り、集、と、さ、ふ、の、
ひ、ある、に、う、惜、し、い、う、ふ、此、の、書、を、也、の、業、を、
と、い、つ、た、う、く、強、し、に、全体、花押、と、ある、
大切、なる、の、最、後、の、家、名、し、ん、の、形、の、
を、い、て、ある、の、と、傳、入、の、真、似、の、出来、さ、い、ち、き、
、と、ある、の、と、ある、の、う、此、の、形、を、よ、く、模、写、し、
る、けん、ば、う、ん、と、ある、終、史、の、心、を、
も、傳、味、ある、の、と、ある、の、う、お、め、し、め、し、
真、

つて其の可くを撰合し、他人が口をきくを
許さるゝ荒し、犯すことのあつたとき、
を以つて其人を奪つこと、許さん
を云ふことを、と云ふ、公卿も云張り
同じ事であつて、是等の別を、物を真
正面、あつて、以つて、直に、さるゝ、
を云張り、と云ふ、その、か、佛法、
つて作法であらう。
○此は王羲之の書き、存在し、その、
と云ふ、その、換ふ、後を、まゝ、人、
●中村、おる、その、王羲之の、書き、
宋、

東林堂

リの名人の自家流、に、
と原書の、おも、
つて、その、
王羲之の、書き、
つて、その、
一、
と、
と、
と、
と、

ても年々のあつたのこころを喜ぶまい彼等もよすれ
うしてせんま事ううま地は行かんさうあつ
とちよて満ちしころをふくま地のあつたに
いくち忠告もあつてもせんむあやまる校の
ころと或んころとといふころをうれとつ福井
ころやえれ話して而もういと思つたことを
ち改むとま事を考うことうせんは海
すゝせんむ養子とさうことう商界は出づ
一年あとうりころとさうあつたころを
或る経験ある流儀のえ人とさうあつたころを
人を任用してま事を修うてさうころと商界

東林堂

そあ校あ量の面がう高店入つて何をうれ
うとさうあ行きうう課あつたころをいん
ま向うは閉じし二年位も其印をえにす
こと出来まといと考あつて化あうかこん何
うう困るとさうあつたころを
何んのま校も人を任用し海のあつたころを
教えしころをいんむ役せしころをいん
間が教えしころをいんむ校も態もあつたころを
ううあまあむむい出して人の高店やあつた
仕はうむとさうあつたころをいんむ校も
生しころをいんむ校もあつたころをいんむ校も

のよう〜く〜ちり〜んきと〜びあ〜う
その事業あつうのなや〜の程子と〜
あ〜そ服従の義務を守らういことをあ〜
主人の御命もや〜えんを自分の説き下り
て〜を痛取〜や直らな軒侮しこのお
や〜何ご命〜いあ〜こんま不心得〜
衝突をせ〜いこのご〜
又そのちを〜のなや〜
〜千紙あはれの〜
〜お話〜
後〜
起身の大動機も

東洋書局

手〜
〜
人の言の存〜
あ〜
か〜
〜
法か〜
ひある人のこと〜
〜
者生〜
顧念〜

勤め

既し勤むるは自分の力価の故にぬ俸地
又副の地地位をわつくるものがある、この昔の
十中の八半を遂に致し、其の位地を主と
す例とす、言を誰れの経験にせ
も最初身を立する位地と自分の力価
を比し、いくらく卑しく位を不と致す方
か起すのなるを却りし利便である、此、何れ
とす、自分の力価を比し、卑しく位地の
位地をあんは自分の力を示す、或何の故
地、
人の認めらるる随つて立すの昔をきんら

東
林
堂

と辨するのむあるが、力一杯は、力以上の位
地、
能才の用、
をおき、
此の扱は商業研究なり、
供給過多を生じ仕ひ余り、
生かす人仕、
自学の心掛、
凡は供給過多のなるを、

船里の境り元辰を返りては
船を来れぬ
の如く切つてこそ

関西を大出せぬあまのこころいふ
さるる服店の人今も誇つて
法字士一人を誇つて
出来せんうへ外の人掛をやる
しにねる地の元世困つた
又海上ガイド風情のこの歌
は出まんと云ふまじり
と云ふこと
友人のせうをそよめ
車輪を
東林堂

ちよとせぬのこころをせりて
そろくろのひかす
風を要する
あゝと云ふこと
うへへ

船中の山崎道船子
ねる松方のその
うへに世の
つてよ
松方のその

生心ありて、花より中一よりりりもじりもそ
と辛ふとて多事業を以てのむあるも自ら
記者も其苦言を以て知つてそのことを
随つてそのすまじき回向を表するにみま
他のこの故も多事業を以てを論割の言
い俸給を出すことも出してその保しえ
と法して其の人の後使倆を以て拂う
のむきを以て心すといふは母多くの海軍
を扱ふに人びあるもその資力もあつて
拂りむあるも其のむきもあつて、そのむ
えを以てそのむきもあつて、そのむ
えを以てそのむきもあつて、そのむ

東林堂製

としきんと皮肉を消つてそつれ

○然らば歴代家仲り、法隆寺焼くは焼く
にせハケまゝい論論が起るも、全体法隆
寺を天智紀に以てし、あつて天智紀
年夏四月一を焼くといふ、焼くといふ
ふことゝあつて、その和細之年を再考
せんといふのは、法隆寺の焼くは、七年表
りゆゑに、その焼くといふ、焼くといふ
建屋の格式を研ぎ、その焼くといふ、
又の焼くといふ、古者又を、その焼くといふ、
再建設を、その焼くといふ、論の、その焼くといふ、

いんげん胸を煮うけん胸をもとをそそ
このおちる 胸のこき煙袋と雁首の大き
羅字の長い煙袋のひし手拭をおうそ
る。而して鈴かゝ金杖巾の粗末さうと
掛けるそ

争ひ、梅の長、おききの又へおと程
結りと、清め、おき寺、おき非、梅尾
あゝい、い、おきはおきかゝるの茶の
おきめ、おき群集のやと、ハワ、おき
おきと、おきおき、おきおき、おきおき、
おきおき、おきおき、おきおき、おきおき、
おきおき、おきおき、おきおき、おきおき、

東林堂

けんかいる、おきおき、おきおき、
おき、又市中とよくおき、おき、
かいる、おき、おき、おき、
おき、おき、おき、おき、
おき、おき、おき、おき、

おき、おき、おき、おき、
おき、おき、おき、おき、
おき、おき、おき、おき、
おき、おき、おき、おき、
おき、おき、おき、おき、

うらむ

○往年一途なしくまの身人紙なる候あ
れり御か茂のまの森市川よりたうし
か刑檻鉄りのる塩をみぬと出せし黒物
を言ふは志るし一見せしるるむあし
盤敷終つる人ふ此の黒物一見せし
るるを尸出せしむる人むとせし
とと女もあふるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるる
は人ゆつるるるるるるるるるるる
の流しるるるるるるるるるるるる



を抱き人の江戸の狂くり抱し言ふ云はし
めし思ふ物、こころの上なる黒物、黒物
珠しきしあふるるるるるるるるる
傍へし、あふるるるるるるるるる
り、こころの言ふるるるるるるる
き、あふるるるるるるるるるるる
七、あふるるるるるるるるるるる
し、あふるるるるるるるるるるる
あ、あふるるるるるるるるるるる
あ、あふるるるるるるるるるるる
あ、あふるるるるるるるるるるる

セテるが後日約を履き、桐り松目のおを侮り
て言る自由を著者よりしゝえを市川家
へ戻ししとて此の書も十日かゝる終りし
ありとてふ此書も古くは唐津の物
を考へし株をのりて行かんとして
は塩と量る料は陶土を物と
し塩筋とていふものありし。之れが代
の活るなりけり。

○中夏病を得ん可憐中のと飲禁し得ず、皮
を剥る昔者酒飲を母得、誤ることあり、
大いに病老を忘る、嗚呼予酒を禁しん于茲
五歳、今為戒を儆守するを嘗て人か杯中の
物を忘るるを得んや、今存る会心の者教の即
を抄して代酔と云ふ、三十九を八月十三日迄

○青山白雲醉死 傳奕相少人、善教子、自言
其子不可傳、將卒自誌曰、傳奕青山白雲人也、以
醉死

○毛髮滋味 石裕方明造酒數斛、忽解衣入其
中、恣沐浴而出、告子弟曰、吾平生飲酒、恨毛髮
未識其味、今日聊以試之、庶無厚薄酒中

○欲視別腸 閩王延曦、与翰林學士肉維岳、嘗
會飲極酣、因欲左右曰、維岳身軀甚小、能飲
如許酒、左右曰、酒有別腸、非以肌體論、延曦
欣然、使拽維岳下殿、將取別腸而視之、左右善
對曰、今侍奉飲、樂惟岳最有殊量、取其別

賜、是無可陪奉者、延曦、然之、獲兔、

五回故事

○神全不懼 夫醉者之墜車也、虽疼不死、骨節與人同、犯難與人異、其神全也、乘亦不知也、墜亦不知也、死生驚懼不入乎其胸、是故還物而不懼、彼得全於酒而猶若是、况得全於天乎、
列子

○白叟獨全 茅山元符宮有蘇養直像、自贊、
女上曰、松風鶴、度藤在手、惟此白叟、獨全於

酒

○三臟可流 艾子常孫、門生私語曰、是不可諫止、當以陰事休之一日飲噉、門生密置取賜于艾曰、



凡人具五臟、今師飲而去一臟、何以生耶、艾子熟視笑曰、竟三臟、殆可流、次曰、臍部、

○鬼飲、了飲、囚飲 石曼卿字延年、与蘇舜卿輩一時以飲相高、名曰鬼飲、了飲、囚飲、齧飲、路飲、鬼飲者、夜不以燒燭、了飲者、飲次挽歌、哭泣而飲、囚飲者、露頭圍坐、齧飲者、以毛席自裹其身、鵠飲者、一杯復登樹、下再飲耳、

○三斗壯膽 汝陽王璠 自称釀王、
○酒天地 河陽釋法常 酷嗜酒、每宴日若風雨常醉、醉即孰、寢、覺即朗吟、嘗滑同志曰、

酒天忘名酒地綿邈酒國安恬吾君臣貴賤之
拘、無財利之圖、無刑罰之施、陶之為、湯之為、
艾樂、可得而量也

○婦人不聽 劉伯倫病酒、尚甚、從婦求酒、婦
捐酒毀器、涕泣諫曰、君飲太過、非攝生之道、必宜
斷之、伶曰、甚美、我不能自禁、惟當祝鬼神自
誓斷之耳、便可具酒肉、婦曰、敬聞命、供酒
肉於神前、請伶祝誓、伶跪而祝曰、天生劉伶、
以酒為名、一飲一斛、五斗解醒、婦人之言、慎
不可聽、便引酒進肉、隗然已醉矣
○幸為酒壺、 鄭泉字文淵、博學有奇志、

東坡叢書

而性嗜酒、聞右常曰、飲得美酒滿五斗、醉則以
四時甘脆置兩頭、及覆沒飲酒有斗升減、隨
即益之、不亦快乎、後卒謂曰、我以為我陶
家之側、庶百年後化而為土、幸見取為酒壺
實獲我心矣、

○引著勝地 衛軍王敬文曰、酒正自引人著
勝地、

○請勝醉候 皮日休、題樽詩云、他年渴
幸言何事、請賜劉伶作醉候、

○醉勝人醒 孔顛字思遠、山陰人、骨鯁有風力、
以是死為已任、歷御史中丞、雖醉日長、久而醒

時判決未嘗壅，衆曰：「孔公二十九日醉，勝世人二十九日醒也。」

○中酒味 宋太素尚書中酒法，靜姪鸞於帝渴憶荔枝香，為其悔相續，心和甚尚狂，非真中酒者，不能知此味。

○囚星焚日 衛元規酒後忤丁僕射，以書謝曰：「自茲囚，酒星於天獄，焚醉日於秦坑。」

○兄弟匡坐 阮孚字子遙，集嗜酒，貌短而禿。周文帝愛之，嘗於室內置酒十瓶，瓶大一斛，皆加帽，欲以戲孚，孚適入室，見即敬告，去曰：「吾兄弟輩，何為入官家？」匡坐扣石，宜早還家。

宅，因持酒歸，文帝撫然大笑。

○萬吳冥 戴逵字安道，酒淡云：「醜醜之興，與理不乖，古人既陶，至樂乃用，目絕羣動，耳隔迅雷，萬吳既冥，惟無有懷。」

○糟肉堪久 孔羣好飲酒，王丞相語云：「卿何但飲酒，不見酒家覆甑布日月糜爛？」羣曰：「不爾，不見糟肉，乃更堪久。」世說

○張華博物志曰：君山上有美酒數斗，飲者不死。武帝遣索巴求，果得之，方朔曰：「臣識此酒，請視之。」因一飲至盡，帝欲殺朔，曰：「殺朔若死，此為不驗，以其有驗，殺亦不死，乃赦之。」

吾と才一轉の如の夏秋才二源家の母白
族中ニ義家と春日の鐘、えんり即ち吾家
のありあり、輪丸の夏秋を歴史ニ著ん
るありあり、出徳況の神ありあり、舟
遊びうちり、その時輪丸の中らるる念を
くこしんほりきとくこんと帝う所しんを
おつるぎと、源為義の賜つたのま即ち此の
念ありあり、こんま石の櫃の中らるる念を
七時をたしんありあり、母の「回油を注すこ
らるるつてそらるる」女のおらるる指らるる
じやしと鐘をたしんありあり、銘を助すと

東葉
京大

刻してある族とニ流ある由一と白族の血
痕斑々としてその流む作つたものあり他の
一と上部二一か劃しんありありハ播大書ニ流
の五字あり書きてあり、こんま後二年のゆま
用えん聯隊族のあり、義家なるありの鐘を
さるる質朴のありあり、武王のありあり、
う似たり、懐いことらるるボロくしん揚る
そらるる利唐依理七出来るありあり

同行希と云う所の塩原屋より、^{三巻}村上寺持、
の如しと云ふことを見るし比の事ありし如部
合ひありに、村上寺を修治するの任職をあるを
ことそのうち、つんけんといきとゆひ、其の要る物
と見ては貴つに、好まき寶物の中心を成
服しと云ふこと

天龍寺寺書寫巻

三幅巻唐掛軸如文殊菩薩の像

ものあり、前巻を弘法大師の唐紙と云ふ
の如くありしものと云ふこと、そのうち、
出張りしものと云ふこと、一尺位ありし大巻

東林寺藏

この巻は、物別れの具合、くき原のふりし
ものあり、そのうち、唐紙の三幅巻を、
家の寺にありしものと云ふこと、
刺繍の地的分の美術の像を、
寺にありしものと云ふこと

此寺の之平次子か寺附を、
任ありし、今巻にありしものを、
一冊ありし、此の放克殿表は、
是巻にありし

為証東大御申、左金吾背源頼家廿三

ふ、志をくく記し、地を境上寺の地を又提
ちんと記す

寧一山節し 三拜碑

頼家位牌の上

指月殿額面の上

え、寺も夢のおの由、教えんを指月
殿額面、梓殿の白雲を以て書し、
ひ、七と一切経を、揚げあるを、今
寺の奥方殿う揚げりあるが、多を、
二浴し、高を換制し、と、
ひ、

東林院製

此信長系、皇臣の文書、
任職の済、
ハ二十才の、
物類、
大河の行、
こと、
換の大、
さ、
標、
つ、
所、

瑩然梅園史唯紀候為枕原氏兵所害於此土而
不載墓垣寺故於所不手終者七葉矣去
秋里人小山氏以御前買其地故作樹轉石壘土瀧田
會就詞信盤根而為一土五、往閱之、其最古而
非方物形如葉珠者一尺許口徑五二寸可内二
井粟口以扁石充内以枯骸即為斂頭歎骨
為其明記十二年九月某日也於是乎始知
里傳之為行信也南谷七歲疑襟一朝釋
之矣云々

○修善寺の御堂二の處舊跡と云ふんん地
條河の下車し 狀車一を就之と云ふ地條的

東林園

以の墓を記す、墓を寺家村新井院門
前の島中よりあり、墓石方一人五寸許の自
然石なり 新井院取成盛大禪定門、建保
三年正月六日御堂と刻す、寺院表の處に
思ひす所んも此をの地記、初撰大寺
御堂ありしおんを存す、由事由伊
皇志行を説く、堀城跡の地を即ち
し、當の寺記の書を見よし
寺院の地記、山あり其の林葉、古墳あり
是れ茶々丸の墓を云ふ伊皇志行を安土
に土人云茶々丸堀城跡と云ふ人あり

伊勢中氏を改えたる為成就院を自殺すと
ありし而して城跡跡子と即ち北條の父の邸址
ありし(伊豆志行の記)此の跡子と記す
ハ伊豆志行の女に記す

北條の西に伊豆市打守山の北に在る今も昔と
りとも跡子の由と稱す狩野のり源次守子
守子稱う北條と守山の東を治るし時の
及ありし北條のり守子也跡子を治るる
を城と西也城跡と云ふは守子の守山を
治るし西を狩野のり守子也跡子を治るるを以て
要言とせし也跡子と伊豆のり守子也

方の跡子一人を園車公方と定めしは園車流
り雖も由法家と上りけんは北條のり守子と
甲家親利のり守子也跡子を治るるを以て
天正のり守子を治るるを以て跡子を治るる
なる、廿三歳なりし然るに左馬のり守子
其のり守子伊豆のり守子也跡子を治るる
跡子もろろ要言と云ふは北條のり守子也
と云ふ伊豆のり守子也跡子を治るるを以て
と云ふ伊豆のり守子也跡子を治るるを以て
と云ふ伊豆のり守子也跡子を治るるを以て
跡子のり守子也跡子を治るるを以て
跡子のり守子也跡子を治るるを以て

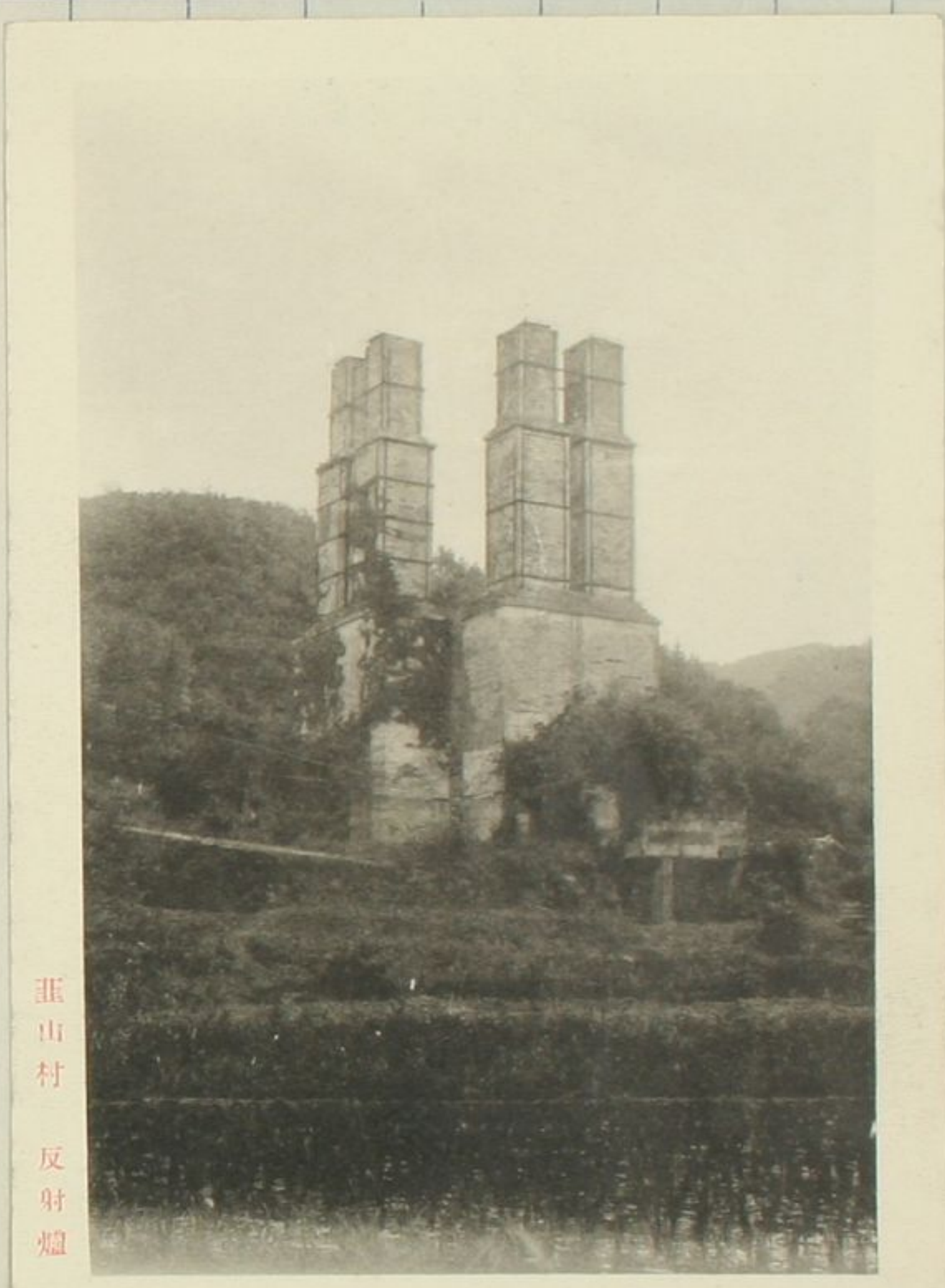
車を祀てし 並山城址のち 蛭ヶ崎 並に 反射
爐址とある

蛭崎ハ源頼朝死後の地なりと云ふも未
つて目睹せんは田圃中一ノ畝在りて平野州
果木僅く数坪の地と云ふも時と云ふは直
ニ河津川の地と連志しそんも久しく海
と思ひそし一見あるも遊りて
志のい往昔々狩野川此地を夾むる海
老も島地のことと云ふ視るに
を以て呼
むを經ヶ崎と云いしるん歎々も地勢の
甚を存せり 海老 桑次の歎るまを以て

也寛政二年飯田忠晶の建てし碑あり文
川秋山章一の撰あり

反射爐ハ嘉永二年江川右衛門左衛門英和
並りて建造し鐵製炮鐵を鑄造のた
るん没けり の 煉石を以て排
せし爐ニあり 砲氣廿五丈の尺あり
五年英和の男英和依傍の上大小銃
砲數つを鑄造し の 伊志志好を
ありし の 英和初の惣屋即寺の地の
がを創設し の 此地を移し の
江川右衛門左衛門の家此地を築き

〇大改朝の... 水谷... 其の男... 其の年...

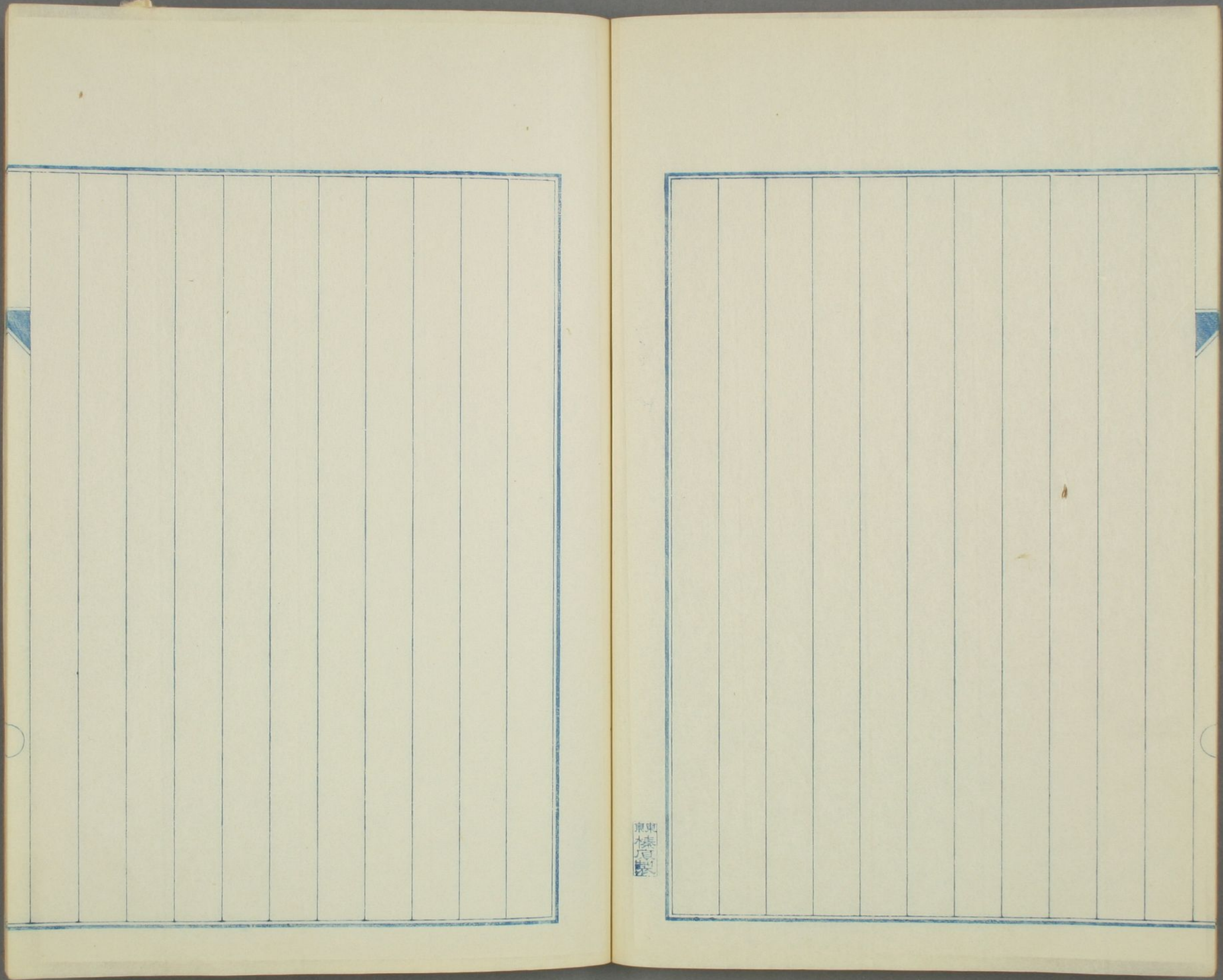


玉山村 反射煙

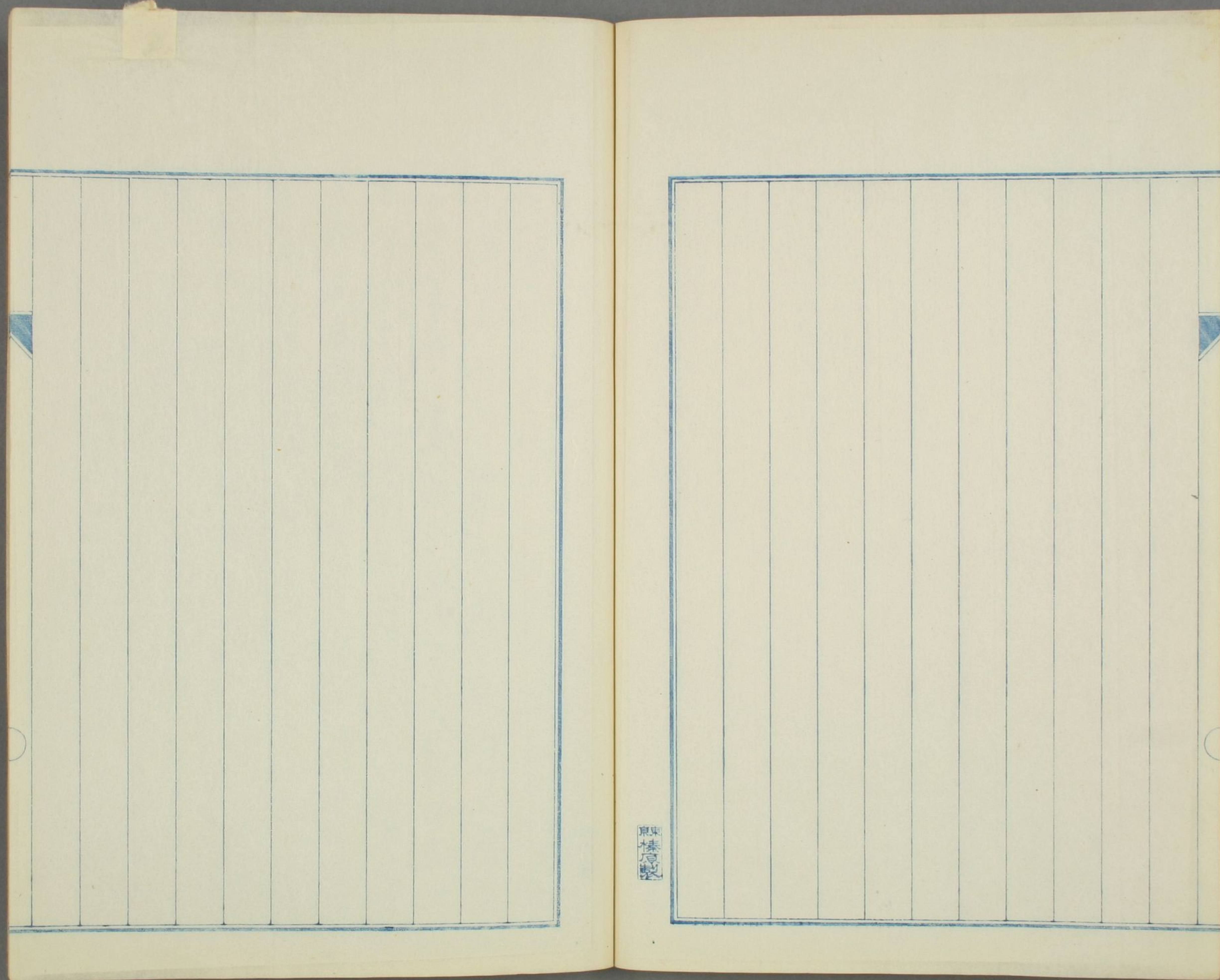
HANSHIRO AT NIRAYAMA.

東洋堂製

多数の日用品を... 山あつた... 交易の行...



東
林
堂



東洋堂製

句稿

八初節

我婢子をおもはば赤い雪の峰
ふところにて蚊を吹り入れて門の月

白馬人三句 二句

ひつかけ行く衛も知らず夏のお織
袷を自て君や来ると待乳の山

梵雲庵の千件佛に題す

栞散る栞より細き佛のよ
稲妻の昨りは知れず秋の花

中條(左)上 苦執一より二に杜詩の風

格を懐ふ

軍捷る天下の稲の干めよ
うつせみを裸にあうて晝寝外

騎驢十三歳と云は古の人の

おけりあり今は再び京に上ると

故郷を七度あとに秋の風

旅中 三句

にきり、自身にみしか夜や善美を

夏山や蟬のこゝろ、雪を走る

気な来りて(ま)りひよりや夏山の

引越して空に栞あり下宿あり

春の雨やうくひすの(果)のほと、よを

遠く居て歸らぬ馬や子霞霞
人の学灯に題を

哲道の 天宮心 年几けたる 鳥か
全的に 秋の日 羽を 遠矢介
冬竹巻 或は 留字と いはせけ
不才 詠して 訪ふ さまじく 也 冬竹巻
詩の 舟や 硯を あらふ 来日の 舟
川あす 山故 郷の 道に出で には
船宿の 千鳥 泳めたる 布園 舟
十を 問に 十三句を 作ら たり うちにて

三句

梅千の 瓶あま けり 雪と 解川

雪と けて 裏田に 蛭を 見たり 日あふ

何事も 雪と けおはと 茶釜を かつ

自炊して

学も 見よと 千いたし 袴 下

ある年の 夏書に 大乘止観 頌を

写し たりて

あらたふと あら難有や あら涼し

明治丙午八月二十六日書

閱覽室

東
棧
厚
裝

